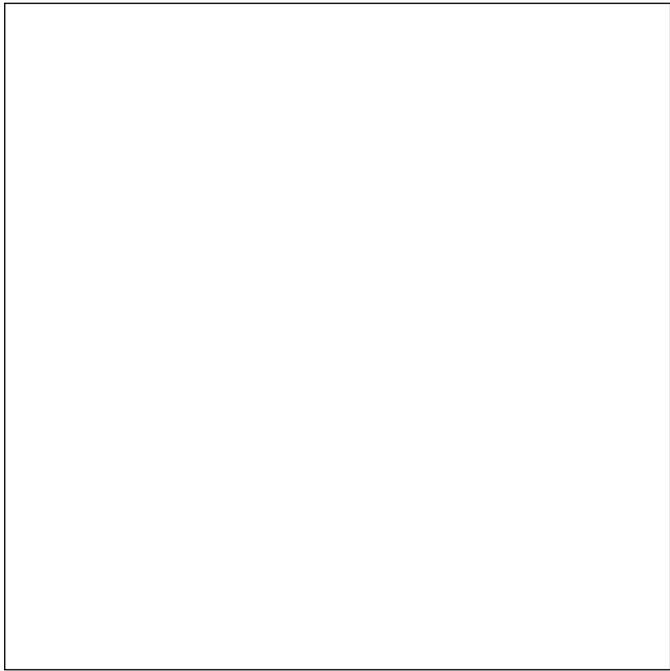




(imageless edition)

 Ursula Nafula
 Peris Wachuka
 Miho Irie
 Japanese
 Level 3



サキツの歌



Storybooks Canada

storybookscanada.ca

サキツの歌

Written by: Ursula Nafula

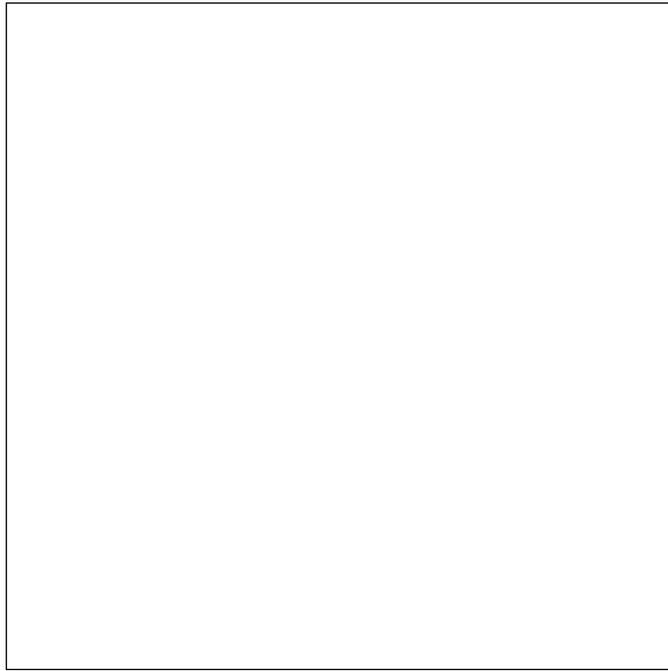
Illustrated by: Peris Wachuka

Translated by: Miho Irie

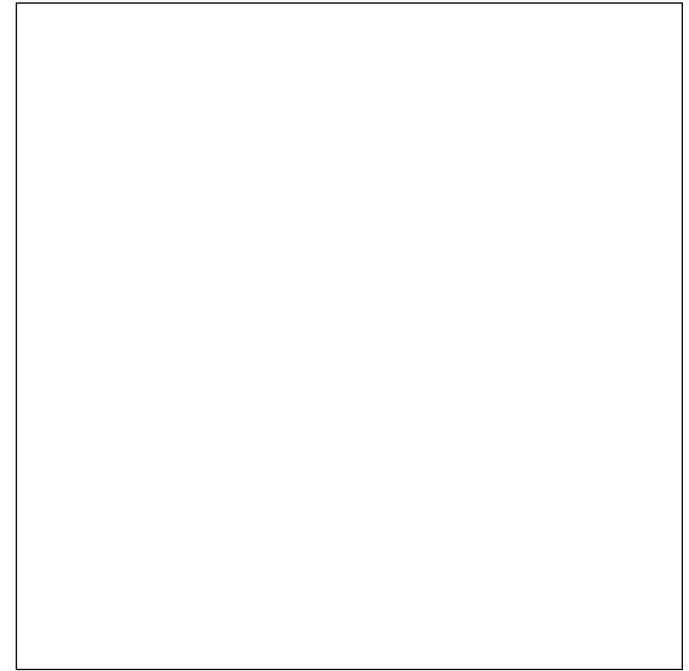
This story originates from the African Storybook (africanstorybook.org) and is brought to you by Storybooks Canada in an effort to provide children's stories in Canada's many languages.



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License. <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0>

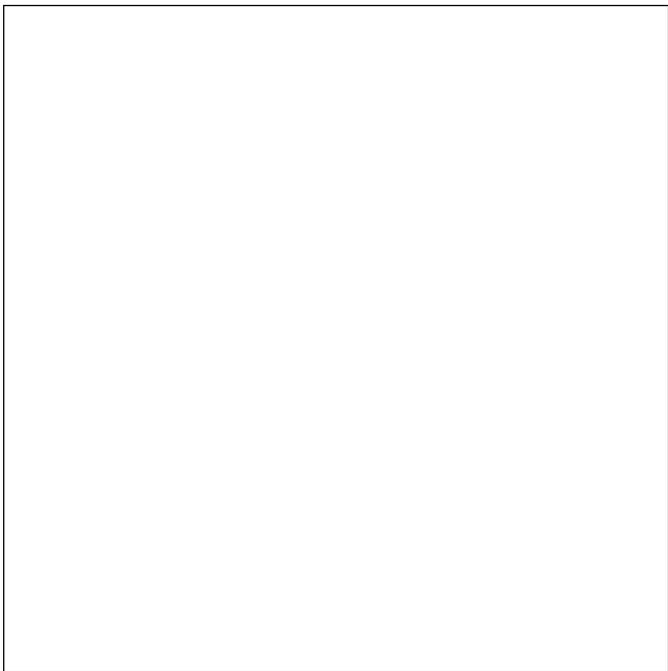


サキマは両親と4歳の妹と住んでいました。彼らは資産家の男の人の土地に住んでいました。彼らの茅葺き屋根の家は木の並びの最後にあります。

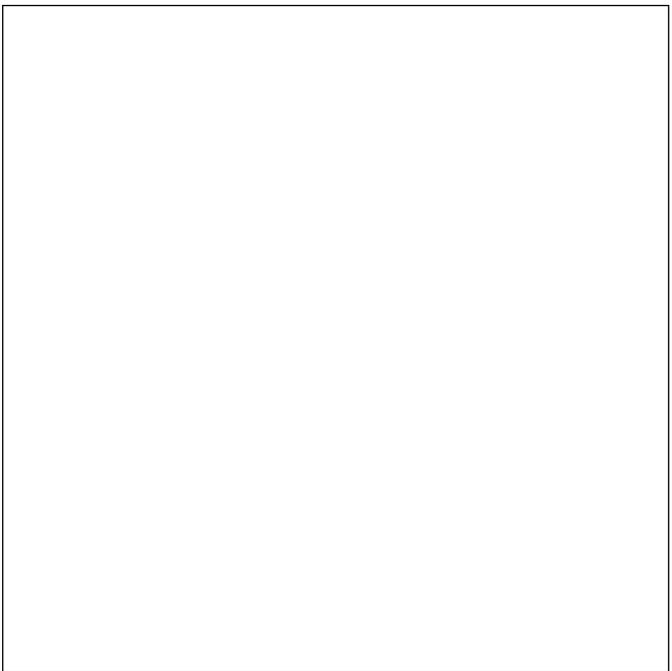


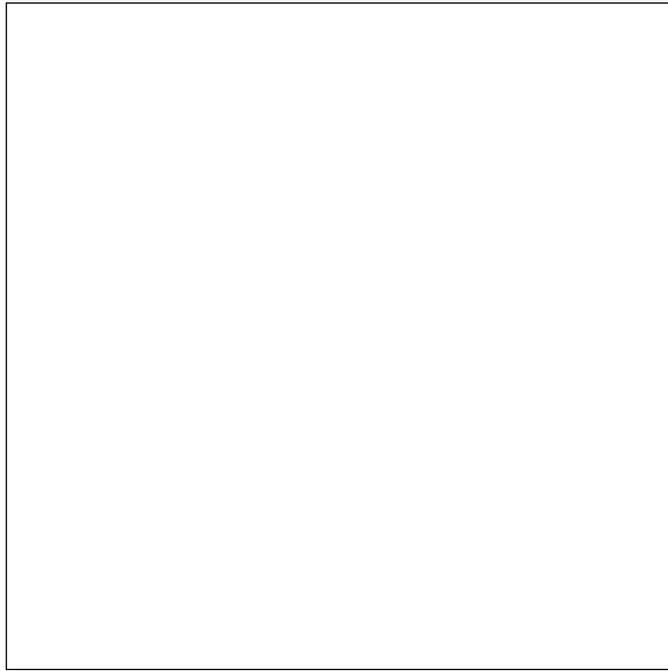
その人は再び息子を見られてとても喜びました。彼は元気づけてくれたサキマを褒めました。彼は息子とサキマを病院に連れていき、サキマは再び目が見えるようになりました。

まさにその時、二人の男の人たち力担架に誰かをのせてきました。彼らは、殴られ、道のそばに置き去りにされていたお金持ちの男の人の息子を見つけたのでした。

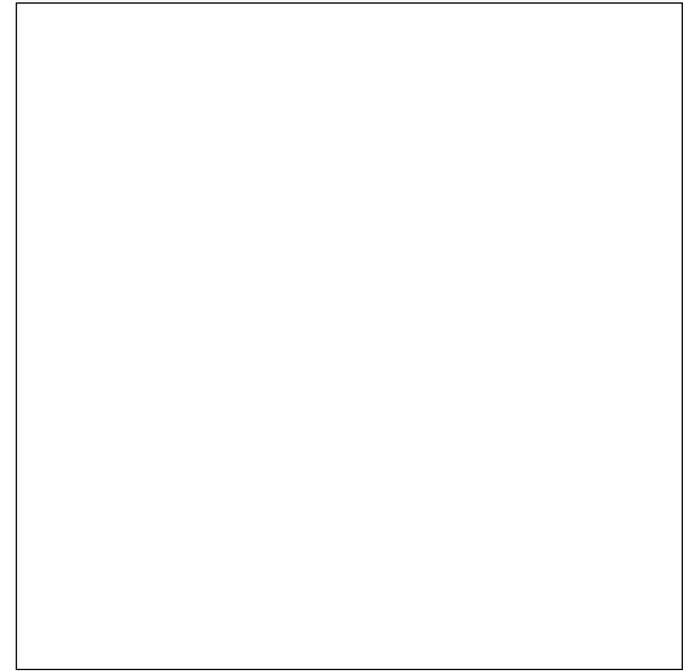


サキアが3歳の時、彼は病気にかかり、視力を失ってしまいました。サキアは才能あふれる少年でもありました。



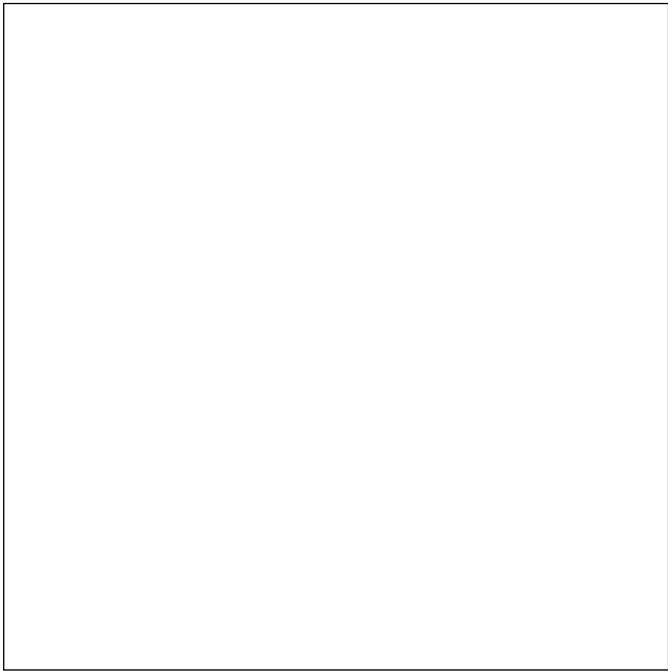


サキマは他の6歳の子供がしないようなことをたくさんしました。例えば、村で年長の顔ぶれに交じり、重要な問題について議論することができました。

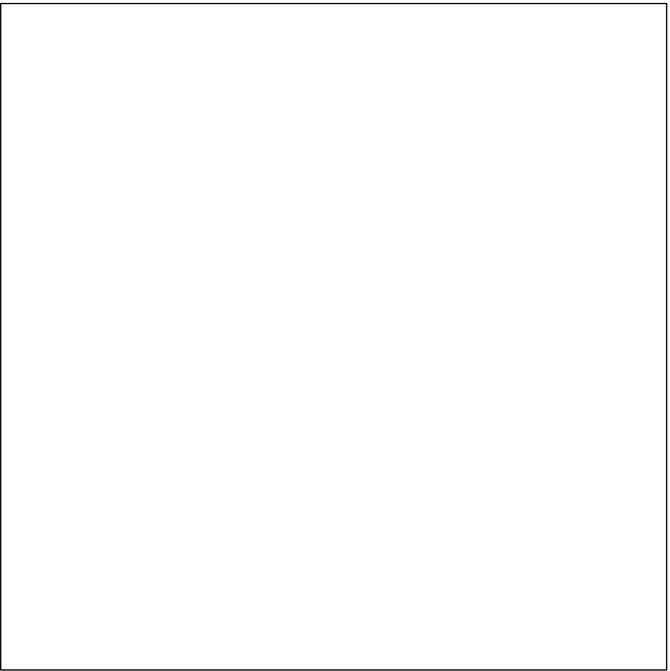


サキマが歌い終わるその場を離れようと踵を返しました。しかし資産家の男の人が慌てでできて、言いました、「もう一度歌ってくれ。」

労働者はやっていることをやめました。彼らはサキアの美しい歌を聞きました。しかしある男の人が言いました、「誰もボスを元気づけられないまままだ。この目の不自由な男の子は慰められると思っているのか？」

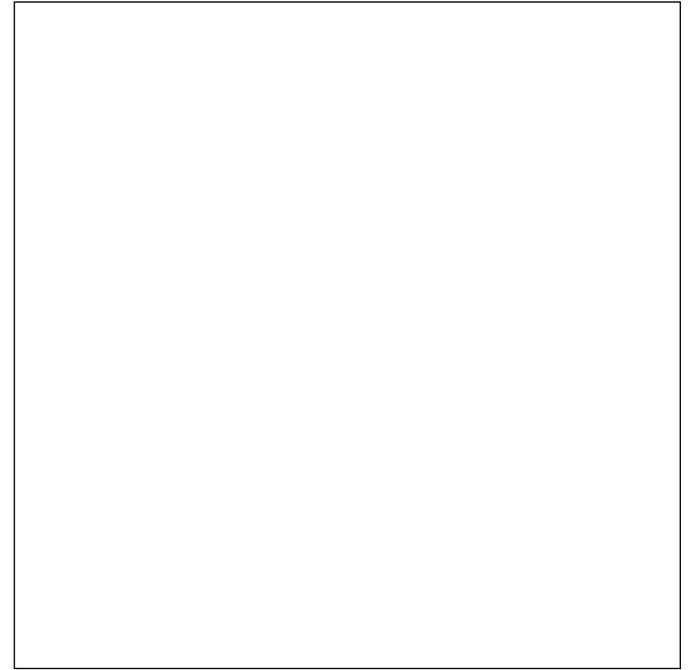


サキアの両親は裕福な男性の家で働いていました。彼らは朝早くに家を出て、夕方遅くに帰ってきました。サキアはその間、幼い妹と家に残されていました。



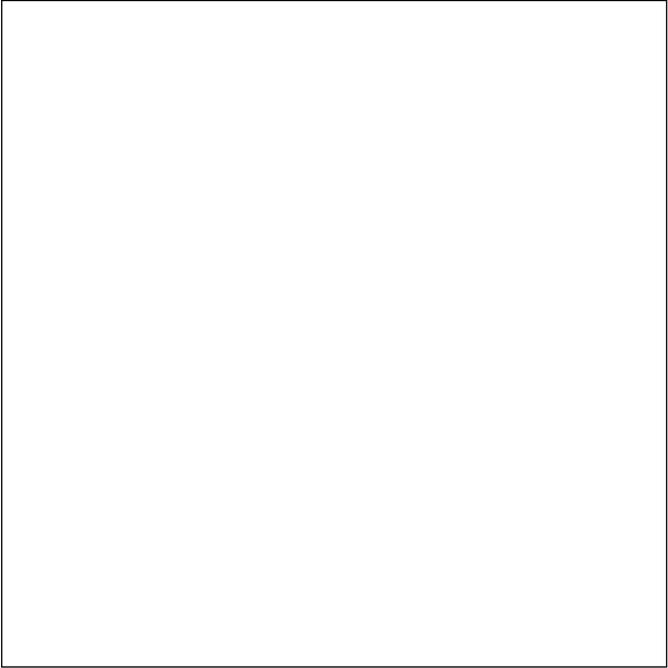


サキマは歌うことが大好きでした。ある日、母親が彼に「どこでこういう歌を学んだの？サキマ？」と聞きました。

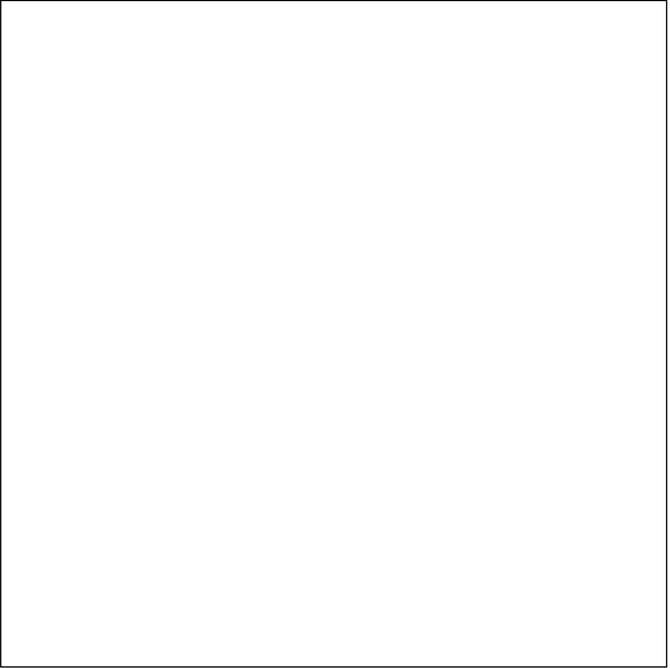


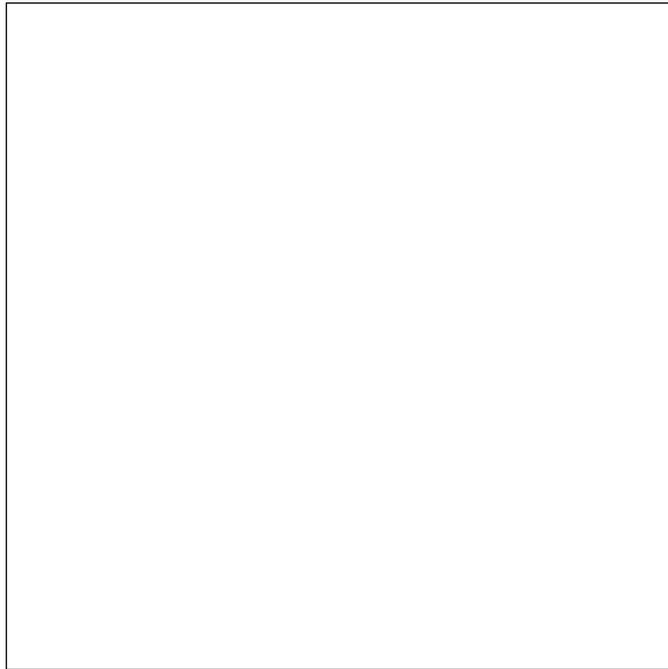
彼は窓の下に立って、お気に入りの歌を歌い始めました。ゆっくりと、お金持ちの男の人の頭が窓から見え始めました。

次の日、サキアは小さな妹にお金持ちの男
の人の家までの案内を頼みました。

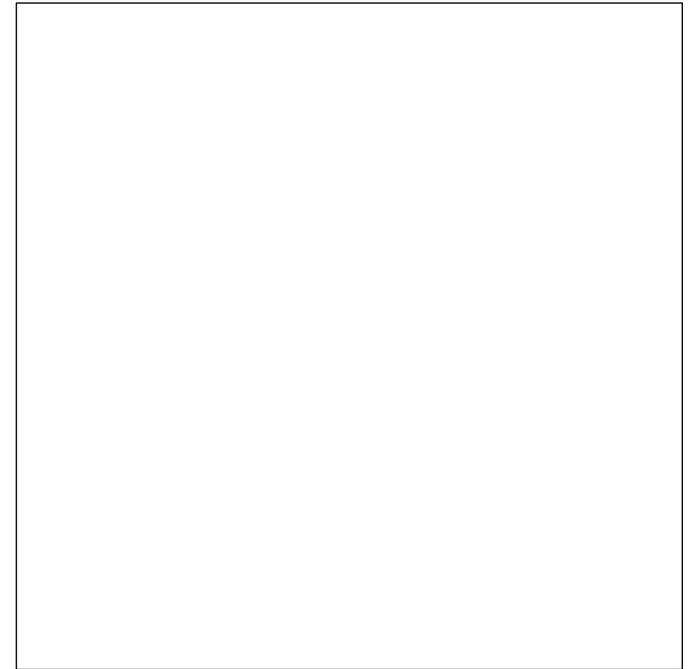


サキアは「僕は歌をただ知っているだけだ
よ、お母さん。僕は頭の中で歌力聞こえ
て、それで歌っているんだ。」と答えまし
た。



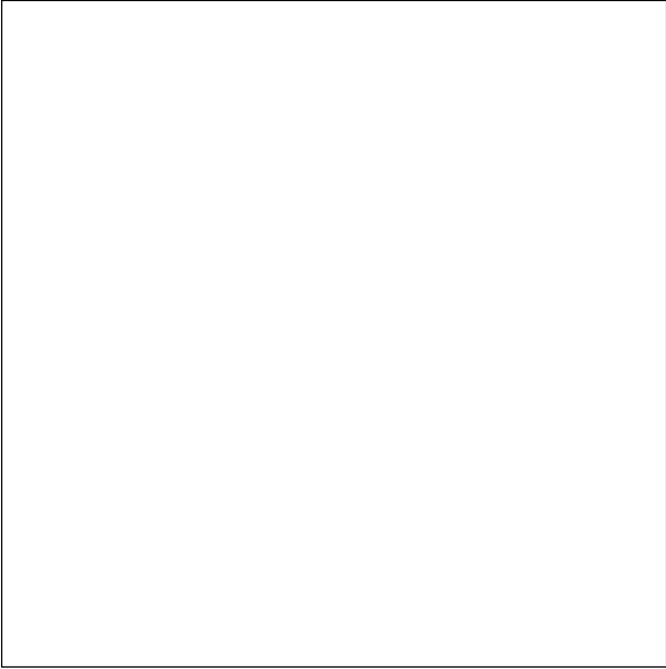


サキマは妹に歌ってあげることが好きで、特に彼女がお腹を空かせているときに歌ってあげていました。妹は彼のお気に入りの歌を歌っているのをよく聞いていました。彼女はよく心地のいい音楽に合わせて体を揺らしたものでした。

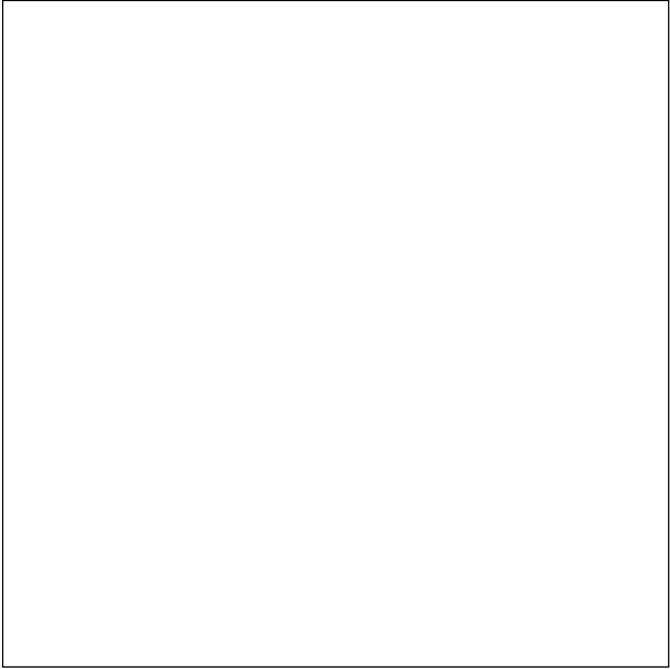


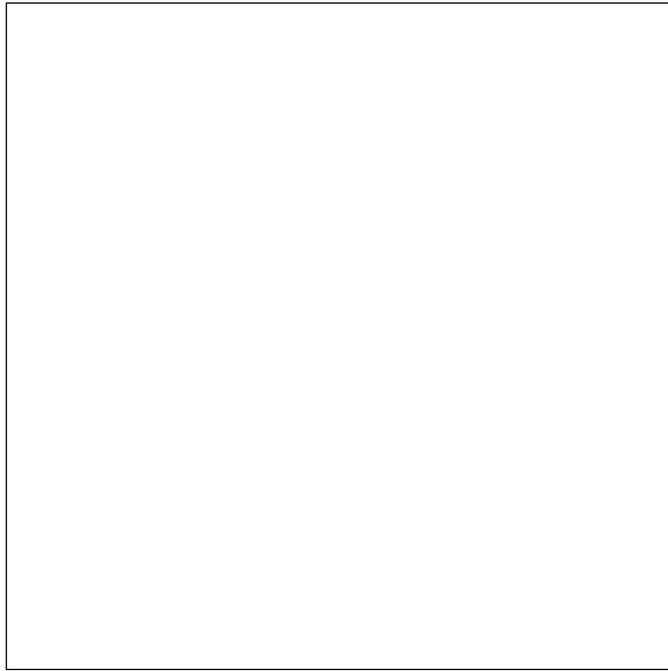
しかしながら、サキマは諦めませんでした。妹も彼を支持しました。彼女は「私がお腹を空かせているとき、サキマの歌が心地よくさせてくれるんだ。歌は裕福な男の人も心地よくさせるだろうな。」

「僕が彼のために歌うよ。彼は再び幸せになるかもしれない。」とサキアは両親に言いました。しかし両親は彼の意見を聞き入れませんでした。「彼はとても裕福だ。お前はただの目が見えない男の子だ。お前の歌が彼を救うと思うのか？」

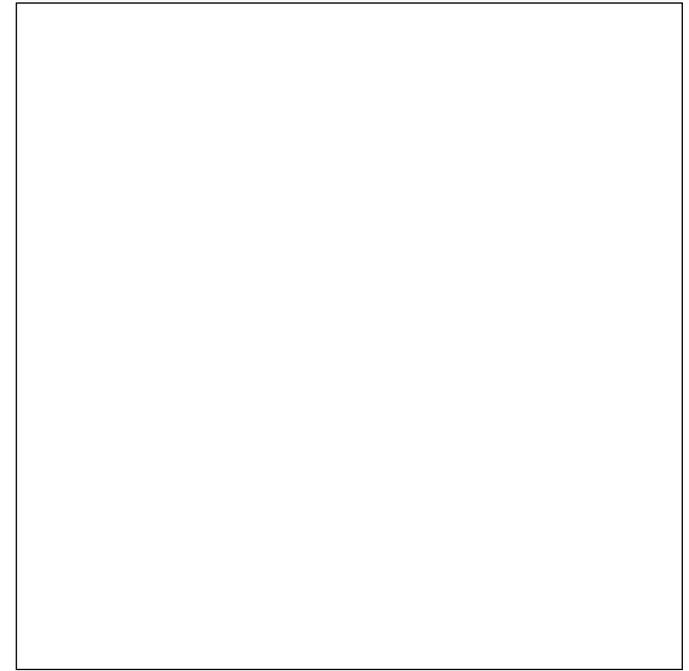


「何度も歌を歌ってくれる？サキア。」と妹は彼に何度も頼みました。サキアはそれを快く受け入れて何度も何度も歌ってあげました。





ある夕方、両親が家に帰ってくると、とても深刻そうにしていました。サキマは何か悪いことが起きたのだと分かりました。



「何があったの、お母さん、お父さん？」とサキマは聞きました。サキマはお金持ちの男の人の息子が行方不明になっていることを知りました。その男の人はとても悲しみ、孤独を感じていました。